

研究の紹介

亜熱帯の気象条件を活用した沖縄県での アスパラガス端境期生産への取り組み

【取り組みの経緯】

アスパラガスは野菜の中でも収益性の高い品目として有望ですが、秋～春期には国産品の生産が国内需要を満たしておらず、輸入品で補わざるを得ない状況です（図1）。

そこで今年度より、農林水産業・食品産業科学技術研究推進事業で九州沖縄農研が代表機関、長崎県農林技術開発センターと沖縄県農業研究センターが共同機関という構成メンバーで温暖な気象条件の九州、さらに九州では低温で萌芽しない時期でも萌芽（写真）が可能な亜熱帯地域の沖縄県で秋～春期の国産アスパラガスの供給力を強化するための“長期どり”の新作型の開発に取り組んでいます。

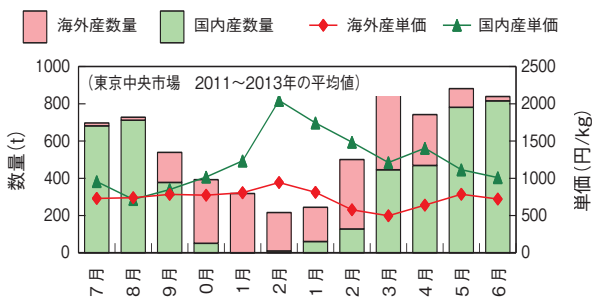


図1 アスパラガスの市場取扱数量と単価



写真 沖縄での11月のアスパラガスの萌芽状況
九州では11月はほとんど萌芽しません。

【取り組みの内容】

“長期どり栽培”とは、親茎を仕立て光合成を行わせつつ、若茎の収穫を長期間行う栽培法です。九州でのアスパラガス生産のほとんどはこの栽培法で、主に2月～10月が収穫時期になります。今回の取り組みは、九州では夏の収穫量を抑えて春と10月の収量を増やす作型の原型を、また、沖縄県では夏と秋の収穫量を抑えて光合成産物を蓄積させ、生産量が少なく高単価で取引される10月～翌年の5月に収穫できる作型の原型を開発するものです（図2）。すなわち、想定した時期に十分な収量を上げるためには、親茎をどのくらい残して、いつ頃に収穫を終了するのが良いのか、親茎をいつ頃更新するのがよいのか、などを検討しています。九州沖縄農研では、植物体内の光合成産物や水分の動きも研究し、技術開発に取り組む予定です。

【今後の期待】

現在の沖縄県でのアスパラガス生産量はごくわずかですが、冬でも気温が高いため国産アスパラガスを周年で供給できる大きなポテンシャルを持っています。沖縄県農業研究センターで開発した2月～11月収穫の作型に、本事業で開発予定の新しい作型を組み合わせることは、沖縄県のアスパラガスの生産と供給力の強化につながり、消費者にも役立つものと考えています。【園芸研究領域 渡辺 慎一】

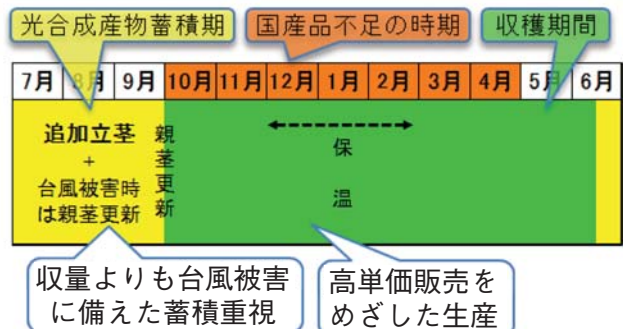


図2 開発を想定している沖縄での作型